

平成30年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立田原西小学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには、学校の状況や児童の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があります。その上で、家庭や地域と一体となって児童を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから、平成30年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校児童の学力や学習状況の概要について、以下のとおり公表します。

また、調査結果は、学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので、調査結果の分析、指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1 目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

2 調査期日

平成30年4月17日(火)

3 調査対象

小学校 第4学年、第5学年（国語、算数、理科、質問紙）

中学校 第2学年（国語、社会、数学、理科、英語、質問紙）

4 本校の実施状況

第4学年	国語	38人	算数	38人	理科	38人
第5学年	国語	42人	算数	42人	理科	42人

5 留意事項

(1) 本調査は、対象となる学年、実施教科が限られていることや、必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから、本調査の結果については、児童が身に付けるべき学力の特定の一部であることに留意することが必要となる。

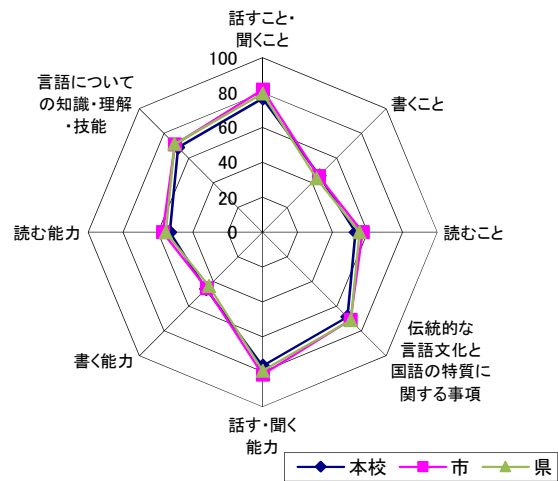
(2) 本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。

(3) 平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため、「本年度の状況」、「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立田原西小学校 第4 学年【国語】 分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	話すこと・聞くこと	76.6	81.6	79.4
	書くこと	45.9	45.4	43.6
	読むこと	53.2	57.2	55.5
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	68.6	71.1	71.4
観点	話す・聞く能力	76.6	81.6	79.4
	書く能力	45.9	45.4	43.6
	読む能力	53.2	57.2	55.5
	言語についての知識・理解・技能	68.6	71.1	71.4



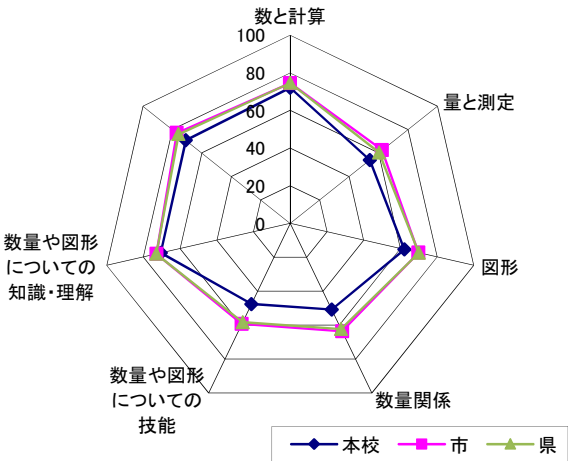
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
話すこと・聞くこと	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・話し合いにおいて司会者の役割を理解し、進行したり発言したりする問題では、県の平均を上回っている。 ・理由を挙げながら筋道を立てて話す内容では正答率が低く、発言の仕方について、選択肢を読んで内容を理解する力が不十分であった。	・少人数で話し合う機会を多く設ける。その際、毎回司会者を変え、誰でも司会進行ができるよう工夫をする。 ・相手に伝わるように筋道を立てて話ができるよう、朝の会のスピーチや日々の生活の中で指導する。
書くこと	平均正答率は、県や市とほぼ同じである。 ・文章構成を意識して書いたり、メモを基に適切な内容を書き入れたりする問題では、県の平均とほぼ同じである。 ・メモや友達の意見を基に、報告レポートの内容を書く問題では、県の平均を大きく上回っている。問題文の内容は、本校の総合的な学習の時間で4年生が扱った「福祉」についてであった。関心のあることについては、意欲的に読むことができた。	・朝の学習や授業中などに文章の構成を意識して書けるよう、繰り返し練習して定着を図る。 ・日記を活用したり短作文を取り入れたりし、文章を書くことに慣れるような機会を増やす。 ・字数を制限したり、課題を出したり、目的に合った文章が書けるよう、様々な練習問題を行う。
読むこと	平均正答率は、県や市を少し下回っている。 ・説明文では、中心となる語を捉えたり、文章の要点を整理したりする問題では、平均を下回っている。児童の回答は正答に近いのだが、漢字やひらがなの間違いにより誤答となる割合が多く見られる。 ・物語文では叙述を基に登場人物の気持ちを読み取る問題は平均とほぼ同じである。感想を発表する記述式の設問は0%で、内容を理解し条件に合わせて書くことが不十分である。	・読書の幅を広げる声を掛け、いろいろな分野の本を読めるようにする。 ・説明文では、段落ごとの要点を整理したり、中心となる語を捉えたりする活動を丁寧に行い、読み取る力を定着させる。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	平均正答率は、県や市を少し下回っている。 ・漢字の読み書きは県の平均を下回っている。無答の児童も見られる。 ・ローマ字や国語辞典の使い方、指示語については平均を上回っている。 ・毛筆の注意して書いたところを選択する問題では56.8%と県より低く、「はらい」や「おれ」などの言葉の理解が不十分である。	・漢字は日々の練習だけでなく、日常生活の中で習った漢字を使う習慣づけをし、定着を図る。 ・文脈に合う漢字を使う練習を行う。 ・ローマ字に触れる機会を意図的に作り、読めるようにする。 ・毛筆指導時に、「右はらい」「左はらい」「おれ」などの言葉を使って、実技に結び付けて理解させるようにする。

宇都宮市立田原西小学校 第4学年【算数】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と計算	72.1	74.5	74.6
	量と測定	54.1	62.4	60.4
	図形	62.2	69.9	70.1
	数量関係	50.8	63.6	62.3
観点	数学的な考え方	47.6	59.2	58.3
	数量や図形についての技能	70.5	72.9	73.0
	数量や図形についての知識・理解	71.0	77.1	76.0



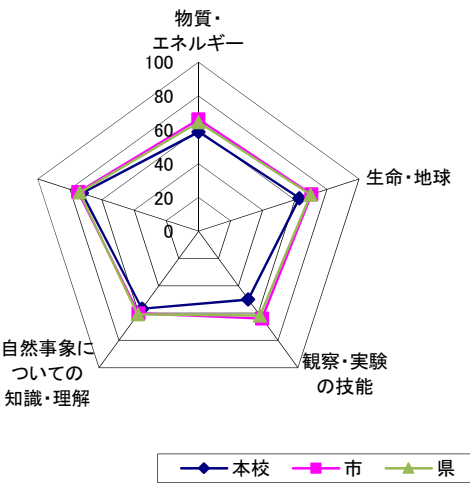
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・基本的な計算についての設問では、県や市と比べて正答率が高く、正確に計算する力が定着している。しかし、わり算を用いて何倍かを求める設問やかけ算の仕組みを答える設問では正答率が低く、乗法や除法の意味についての理解が不十分である。 ・数直線の1目盛りの大きさを読み取る設問では、課題が見られる。	・日頃から朝の学習などの時間を活用して加減乗除の計算の基礎基本の定着を図るとともに、文章題に積極的に取り組み、文章から加減乗除の特徴が読み取れるように指導していく。 ・数直線上で表す単位や1目盛りの大きさなどを読み取り方のポイントをおさえ、目盛りの読み方の習熟が図れるよう繰り返し復習を行う。
量と測定	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・ドッジボール1個のおよその重さを選ぶ設問では、正答率が低く、重さを実感を伴って捉えて理解することが不十分である。 ・時刻を求める設問では、県や市と比べて正答率が低く、理解が不十分である。	・日常的に体験的な学習を取り入れ、日常生活と関連付けて理解が図れるよう指導を行っていく。特に、重さの学習の際には、児童自身が実際に具体物を手に持つような重さを実感しながら測定する活動を取り入れて指導を行う。 ・時刻と時間の学習では、日常生活の中で時間を量としてとらえる機会を増やし苦手意識をなくすよう指導をしていく。
図形	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・折り紙を2つに折って切った後、広げてできる形を選ぶ設問では、市や県とほぼ同じく8割以上の正答率であった。三角形の性質についての理解が十分できていない児童が多い。 ・箱に入ったボールの半径を求める設問では、市や県の平均を大きく下回っている。半径と直径の言葉の違いに気付かず、誤答になってしまった児童が多く見られる。	・円と球の学習では、半径や直径などの復習を行って定着を図るとともに、円の作図以外のコンパスの活用法にも慣れさせるような課題に取り組ませていく。 ・図形の作図の際には、与えられた1辺の続きを作図するなど、条件のある作図に取り組ませ、様々な方法で作図できる力が身に付くように指導を行う。その際、図形の定義を必ず確認し、定着を図っていく。
数量関係	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・未知数を口とした線分図を選ぶ設問では、市や県の平均を大きく下回っている。等分除の問題場面の理解が十分でない児童が多く見られる。 ・棒グラフの棒の高さが同じでも表す人数は異なることを説明する設問では、正答率が2割以下とかなり低い。記述式の設問で、正答の条件を満たしていない児童が多い。	・未知数口を用いた立式の問題に多く取り組み、定着を図る。 ・日頃の授業の中で、既習事項を活用して課題を解決しようとする意欲を高められるように、一人で課題を解決するだけでなく、友達と学び合って学習する時間を設けるなど工夫して授業を行っていく。また、自分の考えを書いて発表する機会を意図的に設け、表現する力を身に付けさせる。

宇都宮市立田原西小学校 第4学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	物質・エネルギー	58.7	66.1	64.4
	生命・地球	62.8	70.4	69.8
観点	科学的な思考・表現	50.1	64.1	61.9
	観察・実験の技能	56.8	60.2	61.0
	自然事象についての知識・理解	72.5	74.8	74.0



★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の改善
物質・エネルギー	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・天秤の使い方は、正答率75.7%と県を上回っており、天秤の名称をよく身に付け、天秤が釣り合うことからものの重さを推測することがよく理解できている。 ・ものの重さと体積の関係については、正答率27.0%と理解できていない児童が多い。 ・風とゴムの動きについては、実験結果からゴムをねじる回数と進む距離を考察したり、実験結果をもとにゴムをねじる回数と推測したりする問題で、それぞれ56.8%、48.6%と正答率が低い。推測したり、考察したりする問題は苦手な傾向が見られる。	・ものの重さと体積の関係については、物の重さをはかり比較するだけでなく、同じ体積でも物質の違いにより重さには違いがあることを、実験結果の考察を通して、児童に考えさせるようにしていく。 ・風やゴムの動きの実験では、風の強弱によって車の進む距離をグループやクラス全体で比較する中で、どのような特徴があるのかを、教師主導で考察させることで、児童に考察の仕方をしっかり身に付けさせる。また、体験的な学習をとおり思考を深められるよう、教科書以外の教材も積極的に取り入れていく。 ・どの学習でも、予想したり、考察したり、まとめたりする際、自分の言葉で文章に書く機会を積極的に取り入れていく。
生命・地球	平均正答率は、県や市を下回っている。 ・昆虫の育ち方には一定の順序があることや、植物の体の各部の名称については、正答率89.2%とよく理解している。 ・虫眼鏡の適切な使い方は、正答率が24.3%と低く、十分理解できていない。 ・昆虫の成虫がたまごを生む場所と理由について説明したり、昆虫の体の色とすみかとの関係について考察したりする問題は、正答率67.6%と市の平均を下回っている。た。推測したり、考察したりする問題は苦手な傾向が見られる。 ・記録表から日向の温度計を選び、その理由を説明する問題については、32.4%と正答率が低い。記述式問題で、自分なりの理由を説明することに課題がある。	・植物の体は主に、根・茎・葉の部分があることを学ぶだけでなく、様々な草花のどこが根・茎・葉になるのかを、校庭の草花を集めて、考えたり、話し合ったりするなど、今後も体験的な学習を取り入れていく。 ・昆虫の成長の過程で、どのようなものを食べ、どのようなところに住んでいるのか、学習の中で、理由を考えたり、話し合ったりする活動を取り入れるようにする。 ・どの学習でも、予想したり、考察したり、まとめたりする際、自分の言葉で文章に書く機会を積極的に取り入れていく。

宇都宮市立田原西小学校 第4学年 児童質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの

○「家の人と将来のことについて話すことがある」と答えた児童の割合が、県や市の平均を上回っている。

○「自分の行動や発言に自信を持っている」や「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である」と答えた児童の割合が、県や市の平均を上回っており、自信を持って行動することのできる児童が多いことが分かる。

○89.5%の児童が、「自分のよさを人のために生かしたいと思う」と答えた。

○社会で「歴史上の人物やできごとを扱っているテレビを見たり本を読んだりすることが好きだ」、理科で「理科の授業で学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考えている」と答えた児童の割合が、県や市の平均を上回っている。

○92.1%の児童が「授業を集中して受けている」と答えており、県や市の平均を上回っている。

●「授業で自分の考えを文章にまとめて書くことは難しい」と感じている児童が多い。考えを文章で書く機会を増やし、徐々に抵抗感を減らしていけるようにする。

●「毎朝朝食を食べている」「毎日同じ時間に寝ている」と答えた児童の割合が、県や市の平均を下回っている。基本的な生活習慣の大切さについて、家庭に知らせ、協力をお願いする。

●「家で自分で計画を立てて勉強をしている」「家で学校の宿題をしている」「家で学校の予習・復習をしている」「家でテストで間違えた問題を復習している」「家で宿題のほかに自分で考えた勉強をしている」「家で勉強するとき、同じ時刻に取り組むようにしている」といった家庭学習力に対する設問の肯定的回答の割合が、県や市の平均を下回っている。家庭学習の大切さについて、再度指導するとともに、保護者への協力や啓発を行う。

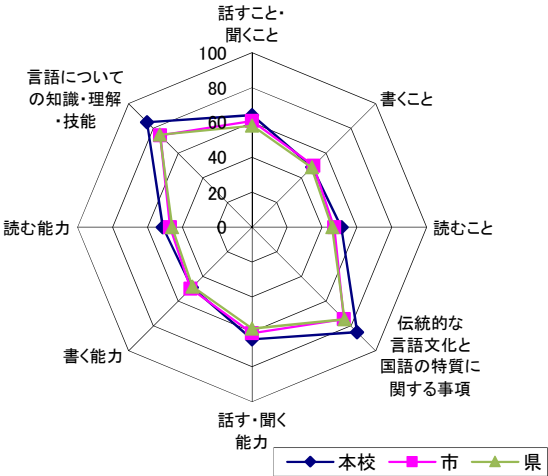
●「時間を上手に使うことをこころがけている」「本やインターネットなどを利用して、勉強に関する情報を得ている」といった自ら学ぶ力に関する質問について肯定的回答の割合が、県や市よりも低い。授業の中で、進んで情報を得ようとする授業の場を設定するとともに、自分から進んで学習に取り組むことの大切さについて指導していく。

●学校の時間以外では平日読書を全くしない児童が23.7%、新聞を読まない児童が81.6%、平日にテレビ・ビデオ・DVDを4時間以上見る児童が28.9%、平日にゲームを4時間以上する児童が15.8%という結果であった。放課後の時間の使い方について、学習が優先されるような心がけを、家庭を巻き込んで啓発していく。

宇都宮市立田原西小学校 第5学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	話すこと・聞くこと	64.2	60.8	58.1
	書くこと	48.8	49.8	48.3
	読むこと	51.2	47.0	45.9
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	85.1	74.4	74.8
観点	話す・聞く能力	64.2	60.8	58.1
	書く能力	48.8	49.8	48.3
	読む能力	51.2	47.0	45.9
	言語についての知識・理解・技能	85.1	74.4	74.8



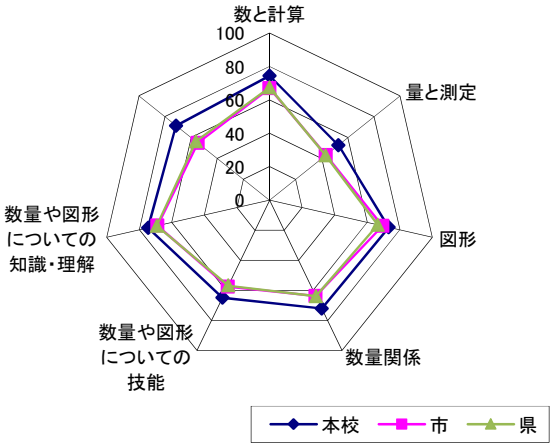
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
話すこと・聞くこと	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・話し合いにおける意見の共通点や相違点を整理して話したり、考えて書いたりすることが、市や県の平均を大きく上回っている。文章の言葉を使って記述する問いでも、適切に書ける児童が多い。 ・話し合いにおける司会の役割を理解し進行することについては、市の平均を下回っている。	・目的をもって聞くことや、意見の共通点や相違点に気をつけて話すことを、引き続き指導していく。 ・話し合いマニュアルの見直しを行い、より分かりやすい使いやすいものにし、司会、意見を言う役などのそれぞれの立場の役割を意識して話し合う経験をさせるようにする。国語の授業だけでなく、他の授業や活動でも話し合いの場を多く設定し、司会の経験から学べるようにする。
書くこと	平均正答率は、県や市とほぼ同じである。 ・提示物の内容に合う資料を選ぶことは、市や県の平均を大きく上回っている。必要な情報を正しく選択する力が着いている。 ・文章ではなく、掲示物の形の資料から必要なことを正しく読み取り説明したり、課された条件に合わせて書いたりするなど、活用型の設問で市や県の平均を下回っている。	・文章ではない資料から内容を読み取る学習や、読み取ったことを分かりやすく説明するような活動を授業に取り入れる。 ・朝の学習などで、条件に合わせた文章を書く練習をさせる。書いたものを児童同士で見合ったり、学級全体で添削し合ったりして、よりよいものに仕上げる経験をさせる。
読むこと	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・説明的な文章の読み取りでは、中心となる語や文を捉えることや、細かい点にも注意しながら内容を捉えることが、市や県の平均を上回っている。記述式での解答でも、17ポイント程度上回っているが、無解答の児童も多く見られた。 ・段落の要点を捉え要約する設問では、市や県の平均を下回っている。 ・文学作品の読み取りでは、叙述を基に、登場人物の気持ちや特徴的な描写を捉える設問で、市や県の平均を上回っている。心情を想像して読む力の定着がみられる。	・読むことの平均正答率はたいへん高いので、これまでの指導を引き続き行っていく。 ・読み取った内容を、的確に要約する活動を授業に取り入れるようにする。 ・記述式の問題では、無解答者が目立ち、個人差が大きい。個別に関わり、一人一人の読み取りや感じ方を大切に扱い、自信をもたせるような授業の展開や支援の仕方を工夫していく。
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	平均正答率は、県や市を大きく上回っている。 ・漢字の読み、書き、ローマ字や慣用句、漢字辞典の使い方などの基礎的な事項がよく身に付いている。 ・「たれ」などの漢字の構成を問う問題が、唯一、市や県の平均を大きく下回っている。	・伝統的な言語文化と国語特質に関する事項の領域の問題の平均正答率はたいへん高い。これまでの指導を引き続き行っていく。 ・漢字学習では、繰り返し練習の他に、いろいろな熟語に触れたり、部首の構成に目を向けたりして、多角的なアプローチで取り組ませ、使える力を更につけさせていく。

宇都宮市立田原西小学校 第5学年【算数】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と計算	74.5	66.9	67.4
	量と測定	52.7	43.2	43.0
	図形	73.2	69.4	66.5
	数量関係	72.0	63.7	63.9
観点	数学的な考え方	64.9	57.5	56.8
	数量や図形についての技能	74.6	68.8	69.3
	数量や図形についての知識・理解	71.5	54.9	56.4



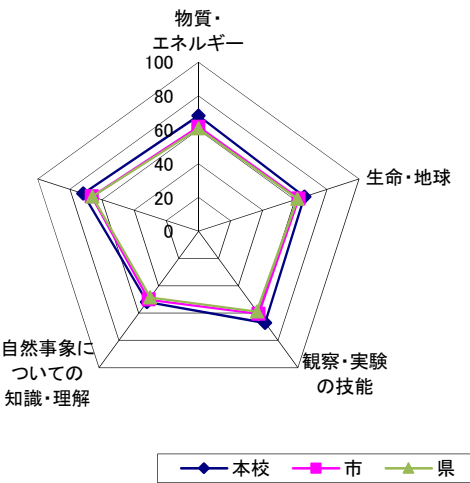
★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・基本的な計算の問題では正答率が高く、基礎的な計算の仕方が身に付いている。 ・小数の大きさや分数を数直線上に表す設問では、市や県の正答率を大きく上回っている。 ・一方の長さが他方の長さの何倍かを求める設問では、市や県の平均を下回っている。基準量よりも比較量の方が大きい場面の理解が不十分である。	・基本的な加減乗除の計算は、今後も朝の学習の時間や家庭学習等を活用し、確実な定着を図る。 ・小数や分数の学習では、端数部分の大きさを表すことの良さに気付かせ、小数や分数の意味について理解できるように指導を行う。 ・小数の学習では、小数を10倍、100倍、 $1/10$ 、 $1/100$ した数の大きさを、単に小数点の移動と考えるのではなく、量的に捉えられるよう数直線や具体物などを活用して指導を行う。 ・何倍かを求める問題では、線分図を活用し、比較量と基準量の数量の関係を正しく捉えさせるよう指導する。
量と測定	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・1辺が1mの正方形の面積についての設問では、市や県の正答率を大きく上回っている。面積を求める公式が十分身に付いている。しかし、はがきのおよその面積を求める設問では正答率が5割以下であることから、日常生活と関連付けた量感覚を身に付けていく必要がある。 ・複合図形の面積を求める設問では正答率が2割以下と低く、理解が不十分である。記述式の設問で、式から面積の求め方を説明することが難しい児童が多い。	・長さや面積、角度などの測定体験を多く取り入れ、量についての感覚を豊かにする。 ・日頃から、授業の中で自分の考えを図や式、文章などで表現する活動を行うとともに、友達の求め方を説明する活動を意図的に取り入れる。
図形	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・平面上にあるものの位置を表す設問では、正答率が8割と高い。 ・平行四辺形の作図の設問では、市や県の平均をやや上回っているが、正しく作図できない児童も4割近くいる。与えられた2辺の続きをかく条件付きの設問であるため、正確に作図できない児童も多く見られた。	・図形の作図の際には、与えられた1辺の続きを作図するような条件のある作図に取り組ませ、様々な方法で作図できる力が身に付くように指導を行う。また、図形の性質を生かして敷き詰め模様作りを取り入れ、辺や角の大きさの関係性に気付かせ、図形の定義についても再確認できるように指導を行っていく。
数量関係	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・ブロックの並べ方とブロックの個数の関係を式で表す設問では、市や県の正答率を上回っている。 ・二次元表についての設問では、正答率が8割以上と高い。また、折れ線グラフと棒グラフの読み取りの設問では、正答率が9割以上と高い。グラフや表の数値の読み取りについては十分身に付いている。しかし、折れ線グラフと棒グラフの数値から変化の様子を読み取り、言葉で表現する設問では正答率が2割以下であることから、グラフや表を活用する力を身に付けていく必要がある。	・日頃から、様々な教科でグラフや表などの資料から情報を読み取る活動を取り入れ、グラフや表を活用する力を身に付けさせる。

宇都宮市立田原西小学校 第5学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	物質・エネルギー	68.3	61.7	60.7
	生命・地球	65.9	62.4	61.6
観点	科学的な思考・表現	67.2	60.6	58.9
	観察・実験の技能	51.8	50.1	48.6
	自然事象についての知識・理解	71.8	66.3	66.0



★指導の工夫と改善

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
物質・エネルギー	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・閉じ込めた空気と水を圧すときの体積の変化を推測する問題や、ポットを押したときに湯が出る理由が分かる問題において、正答率が61%と高かった。 ・水の温度変化と体積変化を関連付ける問題では、正答率が61%と県の平均を下回っている。 ・授業の中で実験を行い体験済みの問題では正答率が高い傾向があるが、いくつかの事象を関連付けて思考や推測を行う問題では正答率が低い傾向がある。 ・記述式の問題に関しては、全体的に県の平均より正答率を下回っている。	・単元や授業の導入時に、生活と結び付くような、かつ発展的な部分から話題を提示して興味・関心を高め、実験の必要性を感じ取った上で取り組ませるようにする。 ・考察を自分なりの言葉や方法でまとめさせるとともに、ペアやグループ学習を積極的に取り入れ、学び合う中で確かな知識の定着を図っていく。 ・振り返り活動において、分からなかった事を書かせ、自分自身の理解できなかった部分を確認し、補強できるよう促すとともに、疑問に思ったことや不思議に思ったことなども記述し、理科に関する興味・関心を高められるようにする。
生命・地球	平均正答率は、県や市を上回っている。 ・「関節」という言葉を問う問題で正答率が97%となっていたことや、生物(昆虫)が主に活動する季節に関する問題で正答率が73%と県や市の平均を上回ったように、理科に関する基礎的な知識は定着している。 ・方位磁針の適切な操作方法を問う問題では、市の平均を上回ったものの、正答率は41%に留まった。 ・天気の様子に関する問題で、コップの外側に水滴がついた理由を記述する問題では正答率が約15%と県や市の平均を下回っている。 ・記述式問題に関しては、物質・エネルギー分野と同様に正答率が低い傾向がある。	・授業の導入では、児童の生活に直接結び付くような現象を取り上げ、「なぜ～」という疑問や仮説を生み出し、進んで解決しようとする意欲を高める。 ・実験や観察で使用する道具の名称を常に正しく呼んだり、適切な使い方ができるよう具体的に支援し、知識と技能の定着を図る。 ・予想、観察記録、結果、考察などを自分なりの言葉で表現したり、単元の終わりには、自分の言葉による振り返りを行ったりし、記述の機会を多くすることで、記述式の問題に対する抵抗感を減らしていく。

宇都宮市立田原西小学校 第5学年 児童質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫	○良好な状況が見られるもの ●課題が見られるもの
○81%以上の児童が、「家の人と将来のことについて話すことがある」「家の人と学習について話す」と答えた。それぞれの質問において、県や市の肯定的回答の平均を12%上回っている。しかし、学力上位の児童と下位の児童との差は20%あり、目標や希望をもつことが学力の向上にも繋がっていることが分かった。	
○83%の児童が「疑問や不思議に思うことは、分かるまで調べたい」と答えた。栃木県や宇都宮市平均よりも15%ほど高い。今後も、児童にそう感じさせられるよう、意欲的に取り組める問題や課題を準備していきたい。	
○100%の児童が「毎日の生活が充実している」と答え、また、88%の児童が「クラスは発言しやすい雰囲気である」と答えた。教師側が間違えてもよいという環境をつくることを意識した結果と考え、継続して児童が安心して生活したり学習したりできる環境を保っていききたい。	
○予習・復習をしているかどうかの質問において、肯定的回答が県や市の平均を上回っている。継続して、自主学習で取り組むよう指導していきたい。	
●「毎日同じくらいの時刻に寝ている」という質問において、学力上位の児童のほぼ100%が肯定的に回答しているが、学力下位の児童は60%ほどであった。寝る時刻が一定ではないことは、基本的な生活習慣が身に付いていないということや、テレビを観たりゲームやインターネットなどを長時間やったりしていることが懸念される。家庭と協力したり、道徳や学級活動、などの授業で指導したりすることが必要である。	
●86%以上の児童が「学習に対して、自分から進んで取り組んでいる」と答えた。しかし、学力下位の児童の肯定的回答は70%ほどに留まった。年度初めに配布した自主学習のメニューを改めて確認し、自分を高められる学習に取り組めるようにしたい。	
●「難しい問題にであうと、よりやる気がでる」という質問において、学力下位の児童の肯定的回答は40%ほどに留まった。文章問題やグラフを見て答える問題など、普段のテストでは見慣れていない問題を「難しい問題」と捉えているとすると、そういった問題に慣れさせるためにも、年間指導計画に位置付け、取り組ませていく必要がある。	
●「授業の最後に、学習したことをふりかえる活動をよく行っている」という質問では、肯定的回答が67%に留まった。日々の授業で習慣付けさせるとともに、家庭学習の学びもふりかえることができるように指導していく。	
●「社会の授業が好きか」という質問において、肯定的回答が53%と県や市の平均を10%以上下回っている。また、「社会科の授業はよく分かるか」という質問においても、県や市の平均を5%ほど下回っている。これらのことから、児童の興味を引くような資料を提示したり、分かりやすい授業を展開したりしていく。また、社会に目を向けることができるよう、新聞の切り抜きに取り組んだり、最近のニュースについて話したり聞いたりする活動も取り入れたい。	

宇都宮市立田原西小学校（第4・5学年共通） 学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で、重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
・学びの楽しさを実感させる授業づくり ・家庭学習の推奨	・単元や授業の導入を工夫したり、学び合いの必要性を感じさせるテーマや発問を工夫したりし、主体的に学ぼうとする意欲を高めている。 ・年度初めに、家庭学習メニュー表を配布し、自主学習ノートを活用させ使い方を具体的に指導している。また、自主学習ノートの秀作を掲示したり、年4回の家庭学習強化週間を実施したりし、家庭への啓発も図っている。昨年度からの取組により、個人や家庭による差が顕著になってきたため、個別支援を強化している。	・「勉強をしていておもしろい、楽しいと思うことがある」の肯定的回答が、5年は県を2.3%上回っているが、4年は6.8%下回っている。 ・「予習・復習」への取組についての肯定的回答は、学力テストの正答率を著しく向上させた5年は、県をそれぞれ8%、22.4%と大きく上回っている。4年は14.7%、19.9%とどちらも県を下回っている。「予習・復習」の重要性が明らかになった。

★学校全体で、今後新たに重点を置いて取り組むこと

調査結果等に見られた課題	重点的な取組	取組の具体的な内容
国語以外の記述式問題の正答率は低めであり、4年で県を下回っている。 ・4年算数:県より10.3%低い。 ・4年理科:県より9.4%低い。	全教科・領域で、事実や考え、感想等を記述する場を意図的に設け、習慣化を図ることで、書くことへの抵抗感を軽減する。	・国語科においては、作文添削や推敲の時間を大切に扱うとともに、読み合いや感想交流の場を意図的に設け、読み手を意識して分かりやすく記述しようとする態度を育てていく。 ・授業の振り返りの場を必ず設け、必要なキーワードや文字数などの条件で書くように指導する。 ・記述したノートやワークシートなどを教師がよく読み、添削や称賛を与え、児童の努力に丁寧に応える。 ・基礎・基本型だった朝の学習の内容を、文章読解や語彙、記述問題、活用問題などに変えていく。